
CHIP チップ

篠崎 海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CHIP チップ

【Nコード】

N9251Z

【作者名】

篠崎 海斗

【あらすじ】

仮想都市、遠音^{とよと}で起こったある事件に巻き込まれ”CHIP”という道具を脳に埋め込まれたごく普通の高校生(?)である雨宮健吾と、それを取り囲むようにして現れた能力者。そして”CHIP”を取り除くために、事件を解決しようとする被害者(雨宮健吾も含む)。はたして、無事に事件を解決して”CHIP”を取り除くことができるのか!? 筆者もまだどのようにするかは決めてません。楽しみ楽しみ!!

シリアスを基本として、たまにコメディーを挟み込んだ痛快SFフ

アンタジ！

嵐の前の騒がしさ

……俺は巻き込まれてしまった。そこで起きていた出来事に……

その事件が起こる日の朝、俺は、いつもより遅い時間に家を出た。もっと早く家を出ていれば、あんなことにはならなかっただろう。俺は消されかけた。いや、正確に言えば、消された後に蘇らされたの方が適切かもしれない。

俺の名前は雨宮健吾。^{あめみやけんこ}一見すれば、普通の男子高校生。しかし、普通の男子高校生と違う点といえば、親、兄弟、そして親戚がいなくて、小さいころから一人暮らしでところかな。他には特に変わったところは無い。頭がずば抜けていいとか、運動神経があるとか、そういうのではない。ただの平凡な……いや、下手をすれば、平凡以下のステータスかもしれない。つまりそういうどこにでもいる高校生なのだ。

ここは遠音。^{とみ}人口270万人ぐらいの都市。自国の中枢都市であり、科学が非常に進歩している。政権というものがひとつしか存在していない。そのせいで近頃までは、独裁政治が続いていた。

家を出て、電車に乗り、しばらく歩くと俺が通っている天雅崎学園^{あまがさきがくえん}に着く。

「いい匂いだ。」

この学園の校門には、毎年見事な梅の花が咲き誇り、もし色で表すならばピンク色の、誰もが和むような香りを放っている。その香りがかぐたびに、俺は少し心が広くなる気がするのだ。

すると突然、後ろから殺気を感じた。棒状のものが綺麗な放物線を描きながら、俺めがけて飛んできたのである。それを俺は間一髪でよけた。そしてその棒状のものの落下地点を見ると、それはまぎれもなく矢であつた。

「バカかお前は！！俺を殺す気か！！」と俺は叫んだ。すると

「チツ！はずしたか……」と矢を放った人物が悔しげにつぶやいた。

「おつはよー健吾！！元気してた！？私はバリバリ元気だよー」俺を殺そうとしていた人物が何事も無かつたように会話を始めた。

「人を殺そうとしておいてよくもまあそんなに豹変できるもんだなあ。」冷静に返した。

「あはは。だって私信じてたもん。きつとよけるだろうって。最悪当たったときは当たったときだしね！！そのときは運が悪かつたって地獄で一人で愚痴をこぼしとけ！！」

この女は、しらみねかれん白峰可憐、鬼だ。俺の幼稚園時代からの幼馴染。外見だけなら、学園一の美少女と言っても過言ではない程かわいい。普通の男子なら、そんな美少女の幼馴染がいるだけで幸せだと思つはうだが、こいつの場合は違う。こいつは悪魔だ。ものごとろがついたころからずっと、俺をサンドバッグ同然の扱いをしている。運悪く、俺はこいつと一緒に学園に通うことになってしまっている。家も隣で近いため、毎朝一緒に学校に行こうと誘いに来るのだが、俺はこいつと並んで学園に行くのが怖いため、毎朝家を出る時間を変えて学校にいつている。弓道部主将であり、地方の大会で何度も優勝をしている強者だ。よく俺はこんなやつ放った矢をよけることがで

きたなあ。と思う読者の方も多いかもしれない。安心してください。僕は毎日あの女の弓矢を喰らっているの、矢をよける能力だけは世界一です。もうこんなやつ矢なんて当たりませーん。

「なんで天国じゃなく地獄なんだ？」俺はさっきの可憐の発言に対する疑問をぶつけた。

「だって、近頃私を置いて一人で学校に行ってるんだもん。寂しかったんだよ！！」

「言えない！！絶対に言えない！！それは、お前と並んで学園に行くのが怖いからだよ。ハハハ。なんて口が裂けても言えない！！言ったら確実に殺される！！どうする俺？この場を切り抜ける方法は……うん？なんでこいつこんなに涙目なんだ？そういえば最後のセリフの「寂しかったんだよ」がちょっと引かかるなあ。まさかこいつ、ひょっとして俺のこと……もしそうならこれで助かるかも知れない！！」

「だってアレじゃん。俺、お前の、サンドバッグ。一緒に歩く。すると、お前、俺殺す。OK？」よし、100点満点だ。これだけ助詞を抜いたら、あの馬鹿にも理解できるだろう。これで俺の清々しい朝は守られそうだ。やったね。応援いただいた読者の皆様、誠にありがとうございます。つきましては、今度の週末、パーティーでも開こうと思います。ぜひ、参加ください。うーん、応援者への謝礼も済んだし、可憐の顔色を見てみよっかな。きつと天使のようなかわいい顔になってるんだろうな。

「……クロス」

「へっ？」聞き取れなかったな。妙に暗い顔をしているし……なに

か悩み事でもあるのだろうか？

「何か悩み事かい？俺でよければ相談に乗ろうか？」今日の俺は、あの梅の香りのおかげかどうか知らないが、ものすごく気分がいいんだ。ちよつとやそつとの悩みぐらいなら解決できるさ。

「オマエヲコロス！！」

……背筋に悪寒が走った。やばい殺される。でもなんで？俺の言動は完璧だったはず、なのになぜ？ひよつとしてこいつ、風邪を引いているのか？そうだ、そうに違いない。いつもは力モ並みの頭の悪さなのに、風邪を引くとさらに悪くなるって言うのか。だとすると爆笑ものだな。ハハハ。よし、風邪を心配してやったら好感度アップだな。すると俺に対する邪知暴虐な行為も少しは改善されるだろう。俺って天才だな。

「あなたの風邪はど……」最後まで言う前に、ヤツは俺に向けて矢を放っていた。さすが弓道部主将。みごとに矢は、俺の自慢の頭に突き刺さっていた。

嵐の前の騒がしさ（後書き）

初めまして篠崎海斗（偽名）、中学三年生です。（受験前なのに大丈夫か？）

初投稿初執筆ですので失敗や、読者の方々からするとチンプンカンプンな表現が多いことや、何コレぜんぜん面白く無いじゃん（笑）とかあると思いますが、ぜひよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9251z/>

CHIP チップ

2011年12月28日23時47分発行